

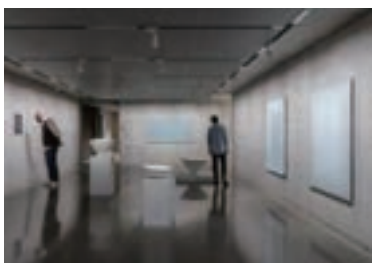
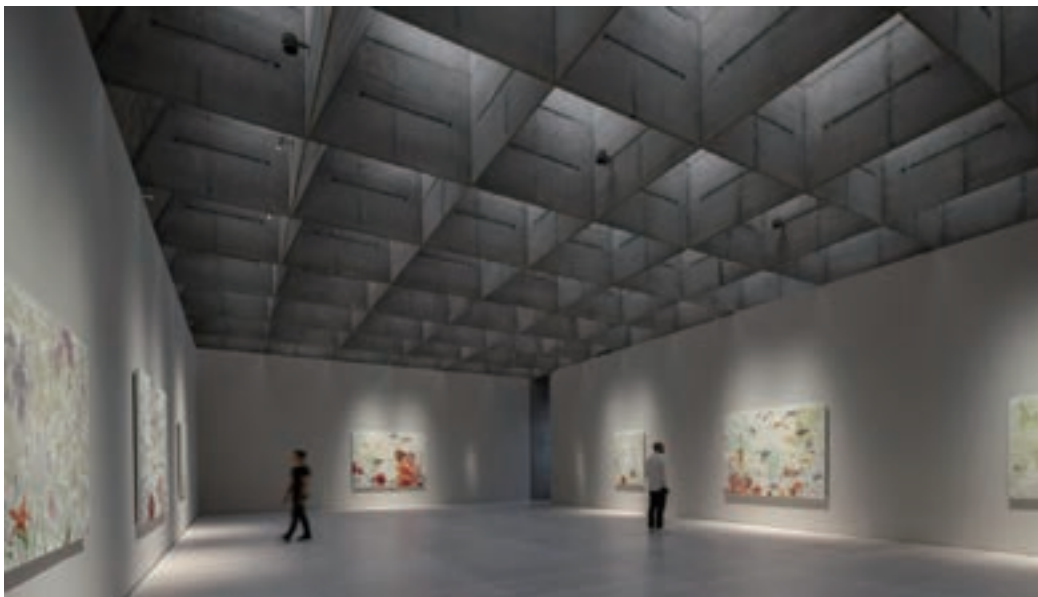
ZENBI

全国美術館会議機関誌

September 2023 [Vol.24]

Sept. 2023

ドイツのエルコ社(ERCO)は、LED技術を用いた建築用照明器具の国際的リーディングカンパニーです。1934年に設立され、1960年代にはヨーロッパにおける建築照明のパイオニアとなりました。現在、世界約55カ国に営業拠点およびパートナーネットワークがあり、約1,000名のERCOスタッフが、持続可能な照明器具の開発と発展に取り組んでいます。



Optec - あらゆる空間に対応するスポットライト

オブテック(Optec)は、どのような用途にも対応します。さまざまな器具サイズと、バリエーション豊かな配光の組み合わせは、ハイコントラストのアクセント照明から展示物への投光照明、壁面をムラなく均一に照射したり、印象的な効果をもたらす鋭いビーム照射も可能とし、美術館や博物館、ギャラリー等の照明設計に最も適したスポットライトです。

Optecなら、照明のあらゆるニーズへの対応が可能です。革新的な光学設計により、効率性と快適性を兼ね備えています。灯体と電源ボックスが分離した器具のデザインは、完璧で優れた熱管理システムと性能を確保すると同時に、直方体と円筒の組み合わせがシンプルかつコンパクトでクラシックな視覚的印象を作り出しています。



Design and application:
www.erco.com/optec

QRコードよりOptec
スポットライトの情報が
ご覧いただけます。
(英語サイト)

Light & Licht

ERCO リプレゼンタティブ パートナー
ライトアンドリヒト株式会社

〒105-0014 東京都港区芝2-5-10
Tel.: 03-5418-8230(代表)
E-mail: info.jp@lightandlicht.com

CONTENTS

ブロック報告 2022年10月~2023年4月

- 2 [北海道] <対面>と<共有>のはざまに 藤原乃里子
- 4 [東北] 石巻市博物館の開館1周年・高橋英吉没後80年を振り返って 泉田邦彦
- 6 [関東] 不確かな道の途中で 滝口明子
- 8 [東京] 博物館法の改正と、美術館の社会的役割について 福士 理
- 10 [北信越] 富山県 4月の展覧会から一短評一 杉本 積
- 12 [東海] 美術館の外で、美術館の内 で 鈴木俊晴
- 14 [近畿] 日常としての美術館—近畿圏の個性的な展覧会を巡って 林野雅人
- 16 [中国] 収藏品展に注目して 中村麻里子
- 18 [四国] 子ども達とミュージアム 鹿間里奈
- 20 [九州] 数年後の展覧会計画、皆さんどう立てていますか? 森園 敦

新規正会員紹介

- 22 — 女子美術大学美術館
- 23 — 慶應義塾大学アート・センター
- 24 — 半蔵門ミュージアム
- 25 — 国立工芸館
- 26 — 下瀬美術館

全国美術館会議とカトーレックとの関わり 森誠(カトーレック株式会社) 28

賛助会員各社 29

事務局から 30

専門委員会から 31

投稿要領 34

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 35

編集後記 36

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.24 2023年9月1日発行 ©(一社)全国美術館会議

[編集] (一社)全国美術館会議広報委員会

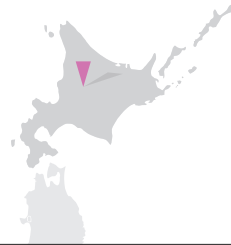
[発行者] (一社)全国美術館会議 〒102-0082 東京都千代田区一番町6-3-103 TEL 03-6272-8555

[デザイン] 宮谷一孝 [印刷] 日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3

ISSN 2186-7259

〈対面〉と〈共有〉のはざまに

藤原乃里子 (ふじわらのりこ・北海道立旭川美術館)



北海道ブロックでは様々なコレクションを活用し、そこに蓄積された調査研究の成果や新たな知見を反映した意欲的な展覧会が企画、開催されている。今期も「イヌイトの壁掛けと先住民アート」展(北海道立北方民族博物館、7月16日～10月16日)、「デザインの原型～プリミティブからデザインへ」展(中原梯二郎記念旭川市彫刻美術館ステーションギャラリー、9月6日～11月13日)、「砂澤ビッキ展」(北海道立近代美術館、11月22日～1月22日)、「札幌美術展 昨日の名残 明日の気配」展(札幌芸術の森美術館、1月28日～3月12日)など示唆に富んだ展覧会を観ることが叶った。また2月14日には「札幌国際芸術祭(SIAF)2024」の企画概要が発表され、2024年を中心とした200年の時間軸への旅というプログラム設計が掲げられた。思えば北海道立近代美術館のコレクションの柱の一つ〈エコール・ド・パリ〉も、その名の誕生から100年を迎えようとしている。

そうしたなか3月2日、3日の両日、北海道立近代美術館を会場に第31回「北海道美術館学芸員研究協議会(略称・道美学芸研)」が開かれた。「道立美術館学芸員研究協議会」として歩み始めて約2年後、1991年に発足した本会には、2023年3月1日現在、国公私立を問わず道内一円46の美術館等機関に関係する87名が加入。資質の向上と各館活動の充実を目指すことを目的に活動している^{※1}。

年毎に参集の機会を設けてきたが、コロナ禍により一昨昨年は開催延期、一昨年、今年のオンラ

イン開催を経て、今回は実に4年振り、満を持しての対面開催となった。「作品の保存と管理」、「ラーニングプログラムの現在」をテーマに外来講師による講演や会員からの事例発表、質疑、意見交換が行われた。安田侃彫刻美術館アルテビアツァ美唄研究員・土谷あすか氏が報告された積雪寒冷地帯における羊毛を用いた石彫保存管理の事例はとりわけ筆者の印象に刻まれたが、それぞれの出席者がそれぞれの知見や課題を持ち帰ったことは想像に難くない。

3年余りの間、会員同士の交流は日頃の情報交換や調査等を通して続けられていたが、今回の道美学芸研は一つ一つの結び目が連繋して多面的なネットワークを生み出す状況について、あらためて実感させる機会となったように思う。〈対面〉という名を与えられた従前のスタイルは、同じ場を共有する私たちにとって、ともに時代を編み上げているという実感を喚起したといつてもよいかもしれない。

さて本会2日目のテーマ「ラーニングプログラムの現在」の一つに「オンラインアート教室」が取り上げられた。本事業の前身として道立美術館では北海道教育委員会の主導により、2012年度から「出張アート教室」を実施してきた。これは道立各館が各圏域で希望する学校に所蔵作品を持参し、学芸員が鑑賞授業を行うものだった^{※2}。

北海道立旭川美術館に限った記録になるが、10年間の「出張アート教室」を振り返ると、近くは当館が学区に所在する徒歩圏内の小学校から、遠くは旭

川の北方240kmに位置する稚内より海を渡った島に立つ中学校まで、道北地域延べ16校623名の子どもたちに51点の作品を持参(輸送)し、鑑賞に供してきた。各回、子どもたちの関心を促すテーマを設定しつつ、当日は作品と対面した子どもたちの声に耳を傾け、反応を肌で感じた上で、コミュニケーションをはかりながら授業に努め、時には開梱や梱包の様子を同道した作業員とともに実演する機会も設けた。保存管理という点では当然ハードルがあり、また輸送や移動のための予算と時間も要したが、実作やそれらに関わる人々の往来、そして教室で交わされる言葉や息づかいが数限りなく集積し、これまでの事業のすがたを形づくっていた。

これに代わって2022年度、試行的に実施されることとなったのが「道立美術館オンラインアート教室」である。当館では昨年10月～12月、道北地域3校46名と「オンラインアート教室」を行った。実施にあたっては現に実作が介在し、対面して行う「出張アート教室」以上に、内容の組み立てに関する先生との、また授業当日の子どもたちとの双方向的なやりとりを重視した。時間をともにしているにもかかわらず、その実感が希薄になりがちなオンラインの傾向を考慮したもので、子どもたちが能動的に授業に参加し、作品鑑賞や美術館体験に近づけるよう、開館時間中のロビー中継やクイズ、作品

制作過程の実演を採り入れるなど、耳を傾け、肌で感じる術に代わるコミュニケーションの工夫を試みた。実際にはリハーサルから当日に至るまで使い慣れない機器操作に翻弄されることの連続で、以前にも増して人員と時間を要する結果となったものの、先生方との連携が爽り、実施後のアンケートでは概ね好評を得た。

オンラインの活用により、広大な北の大地の圏域に縛られることはなくなった。互いに遠く離れた場所に在り、時間や情報を〈共有〉するからこそ、生きる鑑賞や体験の作法もきつとあるのだろう。端緒にいたばかりの事業が将来、深く根を張り、様々に芽吹くすがたを希い、試行錯誤は続く。

いま美術館の現場には、技術や形式、枠組みはもとより、市民に何を感じ、学んでもらうのかという根源的な思考の更新と多様化こそが求められているのだと感じる。オンライン化の加速し続ける時代に、コロナ禍が拍車をかけるかたちで顕わになった〈対面〉と〈共有〉のはざまに、見果てぬ未来の美術館像の一つを重ねみる半年となった。

※1 活動の詳細は本会オフィシャルサイト(<https://doubigakugeiken.com>)を参照されたい。

※2 「出張アート教室」の取り組み事例については、本誌第22号所収の北海道ブロック報告(柳沢弥生「続くコロナ禍での美術館活動」)も参照されたい。



4年振りに対面開催された第31回「北海道美術館学芸員研究協議会(略称・道美学芸研)」写真提供:同会



北海道立旭川美術館での「オンラインアート教室」実施風景

石巻市博物館の開館1周年・高橋英吉 没後80年を振り返って

泉田邦彦（いずみたくにひこ・石巻市博物館）



東北ブロックでは、筆者が勤務する石巻市博物館が2022年11月3日に開館1周年を迎えた。新設館である当館は、東日本大震災の津波で被災・解体した石巻文化センターの後継施設であり、収蔵資料をはじめ、館の方針や役割を引き継ぎ、現在に至っている。文化センターが開館したのは、1986年11月2日。石巻出身の彫刻家高橋英吉（1911-1942／享年31歳）の45回目の命日にあたる。

そもそも文化センターは、1975年に英吉没後33年に市図書館で開催された「遺作展」や、1978年の36回忌日に代表作《潮音》が市に寄贈されたこと等が契機となり、彼の作品を展示・保管する施設が必要であるという市民の声の高まりを受け、市制50周年記念事業として建設が決定されたという経緯がある。そのため、英吉の命日である11月2日を選んで開館した。やがて文化センターの開館記念日は、文化の日である11月3日と重なっていくが、11月2日は当館にとっても石巻にとっても大切な日である。

2022年11月3日は、当館の開館1周年記念であると同時に、英吉没後80年の節目であった。このことを受け、当館では英吉にスポットを当てた企画を開催したので、その試みを紹介したい。

当日は、①企画展示室を利用した、映画「潮音ある愛のかたみ」（1984年公開、片桐直樹監督、75分）上映会、②常設展示室の高橋英吉作品展示室において、英吉の遺族（妻澄江氏、娘幸子氏）

から寄贈された英吉作品及び直筆の手紙等の展示、③展示室でのギャラリートーク、を開催した。上映会は午前10時、午後1時、午後3時の3回行い、企画展示室での映画鑑賞後、映画の余韻を抱えた状態で隣接する常設展示室へ移動し、映画にも登場した英吉作品や、英吉が当時恋人であった澄江氏に宛てた直筆の手紙を鑑賞し、その内容や時代背景を学芸員（筆者）が解説する、という流れであった。

作品のみならず手紙類を展示したのは、それらが津波で被災し、国立西洋美術館での修復を経て返却されたものであり、館では活用に向けた再整理に取り組んでいる最中であったことが挙げられる。活動成果を市民に対して還元することはもちろん、来館者にも英吉の「言葉」に直に触れてもらいたい、という想いもあった。とりわけ澄江氏宛の手紙にある「私には芸術が戦場みたいなのです。一命かけてね。」という文章は、芸術至上に生きようとした彼の人生感を象徴しており、英吉を語る上では必見の史料であった。

さて、件の映画は、前述した英吉没後の市民運動の中から発足したもので、英吉の人と作品を伝えるべく制作された、英吉の生涯を綴った長編ドキュメンタリーである。英吉役の江藤潤をはじめ俳優陣が演じる実在の登場人物を扱ったドラマと、実際に英吉と親交があった人々が当時を思い出して語るノンフィクションとが織り交ざった点において、資料性が高い記録映画ともいえる。俳優たち

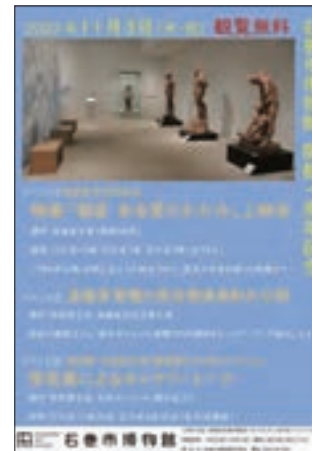
の名演もさる事ながら、当事者の語りが入りこまれることによって、戦争に翻弄された若き天才彫刻家の人生が観覧者の眼前に迫ってくる。なぜ彼は死ななければならなかったのか、夫として父として、そして芸術家としての英吉の無念を考えさせられる内容であり、鑑賞後は様々な感情が交錯し、参加者は英吉の生涯に思いを寄せることになった。

一連の企画を通して実感したのは、来館者と時間・空間を共有することの重要性、原資料そのものが持つ発信力の強さ、であった。映画鑑賞を経て、学芸員・来館者が一定の英吉像を共有したことで、前提を一からひも解く通常の展示解説よりも、英吉の作品や手紙に集中して話を展開できた。なにより映画鑑賞をともにしたことで、ある種の連帯感が醸成され、「英吉の作品をみたい」「英吉のことをもっと知りたい」という、普段はなかなかみられない来館者の熱気が展示室全体を包み込んだ。手紙に綴られた英吉の「言葉」を読み上げ、内容や時代背景を解説すると、展示資料をみなが

ら涙を流す来館者の姿もあった。それは、映画鑑賞と展示鑑賞を組み合わせた相乗効果ともいえようが、来館者の一人ひとりが展示資料と向き合い、そこから発せられる英吉自身の「語り」を心で受け止めたからこそ生まれた光景だったともいえよう。

石巻文化センターの後継施設であり、高橋英吉関連資料を収蔵する当館にとって、周年記念に英吉の存在を欠くことはできない。今後も開館記念日には、新たな切り口を工夫し、英吉に対して思いを馳せる企画を催していければと考えている。

かつて英吉の作品を石巻に集め、それらを展示・保管できる博物館施設を求めて、その建設を実現させた市民たち。「開放性と新しもの好きの風土」の石巻を席捲した熱気が確かにあった。しかし、今やその熱も遠い彼方に行ってしまったというのが正直なところである。それを再び呼び起こし、石巻の文化の発信拠点として、市民とともに歩みを積み重ねていくことはできるだろうか。石巻市博物館の模索は続く。



石巻市博物館 開館1周年イベント チラシ



上映会場の様子

不確かな道の途中で

滝口明子 (たきぐち あきこ・うらわ美術館)



3月に開催された第37回学芸員研修会の最後を締め括る質疑応答において、新型コロナウイルス感染症のパンデミックの経験をどう活かしていくべきかと言う旨の質問が出た。貴重な講義が続き、充実した研修にふさわしい重みのある質問であった。この問いは、ポスト・コロナに向けて第35回学芸員研修会でも発表があったように、美術館運営に携わる一人ひとりがこの3年間取り組み続けた課題であったにちがいない。にもかかわらず、その場で明確な答えは出なかったように記憶している。我々が未だ整理のつかないほどのパラダイムシフトが必要な状況にあることを実感し、コロナ禍がそれほど大きな災害であったのだと再認識せざるを得なかった。

2021年上半年頃からだっただろうか、各館より届けられる展覧会情報から、この未曾有の状況に翻弄されながらも、新たな道を切り開こうとする多くの意欲的な取り組みを知ることができた。2022年の下半期における関東ブロックにおいても、各館の長年の収集及び研究実績を踏まえた展覧会をはじめとして、制限のある状況の中で自館や、その地域に潜在する価値と向き合った企画が多かったように感じる。

例えば福島県立美術館(10月29日～12月18日)と千葉市美術館(1月13日～2月26日)で開催した「没後200年 亜欧堂田善 江戸の洋風画家・創造の軌跡」展は田善自身の画業はもとより、その影響まで丁寧に紹介されており、共同で行わ

れた作品調査・研究が結実した展示内容であった。

埼玉県立近代美術館で開催された「桃源郷通行許可証」展(10月22日～1月29日)は、現代作家による作品とコレクションを組み合わせて紹介した企画であった。例えば、松井智恵と橋本関雪による展示は、両者の作品が呼応し合いながら、その境線が程よく溶け合い、新たなインスタレーション作品として成立していた。現代作家とコレクションによるコラボレーションは近年様々に企画されているが、筆者にとっても、繋がり深い美術館のコレクションに新たな光が当てられ、親しんでいるはずの作品から未知のオーラを感じる体験は心地よい驚きであった。

また、圧巻だったのは群馬県立近代美術館で開催された「アートのための場所づくり 1970年代から90年代の群馬におけるアートスペース」展(1月21日～4月9日)である。群馬県内の1970年代から90年代における主なアートスペースの歴史を振り返ったこの企画は、県内ゆかりの美術について企画を重ねてきた館ならではの重みのある展覧会であった。アートスペースやアートサークルが地域とアートを繋げる重要な役割を担っていることは言うまでもなく、その活動をアーカイブ化してゆくことは、地域ゆかりの美術の歴史を綴る上で必要不可欠である。しかしながら展覧会企画のための調査となると、その距離のとり方がなかなか難しく二の足を踏んでしまうことが多い。積み重ねられてきた研究実績と地域との繋がりを損なわない

努力を感じることでできる展示に感銘を受けた。

筆者の所属するうらわ美術館が所在するさいたま市の浦和地域では、「旧中山道文化資源再生プロジェクト 美術と街巡り・浦和」という地域プロジェクトが継続して開催されている。市民やアーティスト、商店街等々の人々による展覧会や地域研究発表といったイベントから成るアニュアル事業である。筆者も毎年足を運んでいるが、群馬県立近代美術館の企画を見た後に、また新たな感覚で各イベントをみつめることが出来た。

最後に、うらわ美術館の活動を紹介したい。当館で開催した「雰囲気のかたち—見ええないもの、形のないもの、そしてここにあるもの」展(11月15日～1月15日)は、はっきりと見ええないもの、刻々と変わる不定形なものなどを表現した作品を、国内の近現代の絵画や彫刻、ドローイング、映像、写真、インスタレーションなどで構成した企画である。日本を代表する明治の日本画家から現在活躍中の美

術家まで、当館のコレクションを交えながら全105点の作品を紹介した。「雰囲気」という漠然としがちなテーマにもかかわらず、社会状況も後押ししてか、アンケートやSNSには好意的な意見や、熱量の高い声が寄せられた。関連事業ではトーク・イベントやギャラリー・トークに加え、多世代交流による対話型鑑賞や学校連携によるオンライン鑑賞といった新たな取り組みも行った。

新任の頃に先輩職員より作品に触れる職務の重みとともに、美術館の基本理念を教わった。しかしながら近年SDGsやDXが推進される中で、美術館の社会的役割も急速に変化しており、教わった基本理念に照らし合わせ難いことも頻出している。今後も不確かな道を歩まなければならないであろうことは明白ではあるが、美術館の存在意義や使命について新たな視点から検討しながら、一つ一つの事業に誠実に取り組んでいきたいと思う。



うらわ美術館「雰囲気のかたち—見ええないもの、形のないもの、そしてここにあるもの」展「教室でアート鑑賞会」(オンライン鑑賞会)の様子



多世代交流鑑賞会の様子

博物館法の改正と、 美術館の社会的役割について

福士 理 (ふくし おさむ・東京オペラシティアートギャラリー)



この半年の美術館の話題ということで、まず博物館法の改正が、本年4月をもって施行されたことに触れておきたい。今回の改正で、同法の「目的」について、1951年の制定以来掲げられてきた社会教育法の精神に基づくことに加え、文化芸術基本法の精神に基づくことが追加されたことの意味は大きい。文化芸術基本法は、2017年の改正で「文化芸術の固有の意義と価値を尊重しつつ、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策との有機的な連携を図られるよう配慮され」るべきとの条文を加えていた。今回の博物館法改正ではそれを踏まえ、博物館は、従来からの「社会教育施設」であるだけでなく、「文化観光」などを通して「地域の活力の向上に寄与するよう努める」べき「文化施設」でもあることが明記された(公布通知及び第3条)。芸術文化の純粋主義ではだめで、もっと広い視野で、変化する社会の要求に応え、役割を果たしなさい、というふうにとれば、しごくまっとうな指摘ではある。

とはいえ、日本学術会議提言などによっても再三求められていた学芸員制度の改革、立ち後れ疲弊した博物館の現状は正への抜本的方策は提示されておらず、一方的な要求の増大に現場からの反発、批判の声があがるのは無理からぬことだ。現場にいる人間として、筆者も強く思いを同じくする。しかし同時に、美術館「本来の」任務(収集保全、調査研究、展示公開、教育普及)と、変化し多様化する社会のニーズ、人類が直面する諸問題に関

与する社会的な役割を、単なる二項対立に矮小化してはならないとも思う。この両者は互いを要請し、互いを踏まえあってこそ初めて「本来の」深まりを帯びるはずだからだ。

ここで頭をよぎるのは、近年のICOM博物館定義をめぐる一連の議論だ。周知のように2019年のICOM京都大会では博物館定義の改正案が提起され、そこには「過去と未来についての批判的な対話」「民主化を促し、包摂的で、様々な声に耳を傾ける」「現在の紛争や課題を認識しそれらに対処」「すべての人々に遺産に対する平等な権利と平等な利用を保証」「公明正大な存在」「人間の尊厳と社会正義、世界全体の平等と地球全体の幸福に寄与」「多様な共同体と手を携え」「世界についての理解を高める」といった文言が並んだ。従来の博物館定義(「社会とその発展に貢献するため、有形、無形の人類の遺産とその環境を、教育、研究、楽しみを目的として収集、保存、調査研究、普及、展示する公衆に開かれた非営利の常設機関」と比べ、博物館の社会的役割、人類に対する責任に大きく踏み込んでいることが分かる。松田陽氏の報告^{※1}によると、この新定義案は英米系博物館学ではすでに一般化した考えの反映にすぎないようだが、しかし「常設機関」「教育」といった文言の欠落などもあり議論は慎重論に傾き、採決は先延ばしされた。そして昨年8月のプラハ大会において次の新定義が採択された。「博物館とは、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、

社会のための非営利の常設機関である。博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。博物館は倫理性と専門性をもってコミュニケーションを図り、諸コミュニティの参加を得て活動し、教育、愉しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供する。」京都案に比べかなり抑制的ながら、「包摂」「多様性」「持続可能性」「倫理」などの文言に、人類社会が直面する問題に美術館が関与すべきという考え方が集約して示され、かつ「研究、収集、保存、解釈、展示」「非営利の常設機関」「教育」といった文言によって、美術館の従来からの「本来的」な役割を堅持することも表明されており、様々な意見を慎重に吸い上げた結果と思われる。

社会への責任、倫理や批判を実践することは、「本来」業務に対立するものでも、付け足しで行われるべきものでもないだろう。アクチュアルな時代の要求に背を向けた本来業務など不毛だし、本来業務とは別に借り着を纏うように行われる倫理性もまた、不毛だろう。意識的、積極的な先端的試みだけでなく、本来業務の深化とアップデートを通してこそ、人類社会がとりくむべき諸問題に深い意味で関与しうることへの自覚と想像力もまた、必要な

のだと思う。

話はかわり、新型コロナウイルス5類移行(5月8日)を前に、コロナ禍は「終わった」との実感が広がっているのではないだろうか。都内で多い大量動員型の展覧会などではまだ予約制のところが多いが、5月8日以降は予約制終了という例も散見する。冷静にコロナ禍を振り返るにはまだ時間がかかりそうだが、いま思うに、刻々と変わる感染状況に振り回され、紙一重のところで救われたり、ダメだったり、そういうことはいかに多かったことか。卑近な例では、東京オペラシティアートギャラリーの「Sit, Down. Sit Down Please, Sphinx. : 泉太郎」展(1月18日～3月26日)は、いわゆる参加型の展覧会で、観覧者は自ら分厚い布を纏ったり、ポールを立ててテントを張ったりすることが促される。布もポールも使い回しである。たまたま感染状況が落ち着きを見せ、また接触感染は比較的少ないとの情報も行き渡った中だからこそ、実施できた展覧会なのであった…。

※1 松田陽「ICOM博物館定義の再考」『博物館研究』Vol.55 別冊、2020年



東京オペラシティアートギャラリー「Sit, Down. Sit Down Please, Sphinx. : 泉太郎」展
会場風景 撮影：表恒匡

富山県 4 月の展覧会から - 短評 -

杉本 積 (すぎもと つもる・砺波市美術館)



2022 年度は、ようやく「コロナ禍」の行動制限措置も緩和され、全国の美術館の皆様もコロナ以前に戻りつつあることを実感されていたのではないだろうか。かく言う当館も、感染症予防対策を十分に行いながら臨時休館もなく乗り切ることができた。筆者も、コロナのおかげですっかり出不精になってしまい、あまり展覧会を見に出かけていなかった。今回、依頼を受けたので富山県内で 4 月に開催していた展覧会からピックアップして紹介したいと思う。

まず、高岡市美術館は、伝統ある美術・工芸作品を収集・展示しており、その流れからモダン・デザインの父「ウィリアム・モリス 英国の風景とともにめぐるデザインの軌跡」展 (3 月 18 日～5 月 7 日) が開催されていた。私の記憶では、デザイン関係の展示で作品の紹介をされたことがあるが、ウィリアム・モリス個人に焦点を当てたものは、県内で初めてではないだろうか。展示会場は 6 章に分けられ、ウィリアム・モリスの生涯と創作拠点を追う形で構成されている。第 1 章は、彼が生まれ育った地から青年期の縁のある場所が映像として壁面に投影されており、その涼やかな光景を見ながら、後の華麗な装飾美術の萌芽を感じつつ初期作品を鑑賞して行く。第 2 章は、彼が暮らした住居レッドハウス、第 3 章は別荘のケルムスコット・マナー、第 4 章ではマートン・アビー工房といった生活空間や創作の源泉となった場所を、時系列に辿りながらその時に制作した作品を展示している。第 5 章は、晩年に手掛けたケルムスコットプレスの印刷物に関する紹介。第

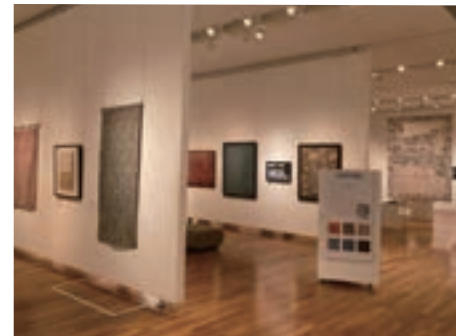
6 章は、モリスが影響を与えたアーツアンドクラフツ運動に関連するもので締めくくられていた。室内は、保護のため照明を抑えてあるが、気にならないほど煌びやかである。身近な植物から、日本では聞き慣れない品種もモチーフとし、鋭い観察から葉脈の細部まで描き出している。作品の一部は、壁紙や内装用フェブリックとしてデザインされた部分を抜き出して額装されている。一つ一つの画面に美しくデザインされた植物を見ていると、目に心地よく映り、繰り返される意匠の波に身を委ねるとモリスが暮らした英国の風景の中に一瞬にして誘われる。会場は、始めから終わりまで彼の理想に貫かれた美意識の中に包まれる空間が展開されていた。

さて、次は、富山市ガラス美術館である。ここは 2015 年に開館した比較的新しい館であり、現代ガラス美術作品を中心に収集している。企画は「アナザーワールド：不思議でリアルな世界」展 (3 月 4 日～6 月 18 日) が開催されていた。竹岡健輔、津守秀憲、今井瑠衣子、木下結衣、小林千紗、植村宏木、高橋まき子といった気鋭の 7 人のガラス造形作家を招待し 4 つのセクションに分けて構成している。一つ目は「未知の表情と出会う」とある。竹岡は、線状のガラスを編み込むように構造体を形成している。籠や一枚の織物のような立体物が光を透過させ繊細な輝きを放っている。津守は、ガラスと土の混合焼成で制作している。焼成する中で外側は黒褐色となり、表面にひび割れを起す。裂けた割れ目の中身は、有機物のようにガラスが糸を引き、生命

の胎動を感じさせる。対照的な二人だが、ガラスに熱を加えた偶然の可塑性を創作に取り込んでいる。二つ目は「思いが交差する場」である。今井は、真鍮製の網で型を起し粉末状のガラスを焼き付けて制作する。彼女は、鍵やクリップ、靴、鞆、シャツなど日用品をモチーフとしており、展示を見ている私達と共通する身近なものを作品化している。そこから作者との対話が始まり、似ているようで異なるそれぞれの日常や思いがあると認識させられる。3 つ目は「生きるということ」と題している。木下は、ガラスの細かいパーツを組み合わせた集合体を形成する。美しい姿をしているが、パーツ自体が活動する細胞であり、増殖し周りを侵食していく生々しさを感じる。小林は、彼女の息吹をガラスに伝える。立ち現れた造形物は、黒一色で彩色され存在感を増し、未知の動植物のようなユーモラスな姿を見せる。二人は、ガラスでの創作を通して異なる視点で生命を見つめ

ている。4 つ目は「見えないものを追いかける」である。植村は、石や木などの自然物とガラスを組み合わせたインスタレーション作品を展開する。ガラスが隔てる内と外、有機物と無機物といった対立するものを強く意識させる。高橋は、睡眠時の夢を源泉として、そこで出会った幻獣をガラスや金属、樹脂などで再現する。美しい極彩色で、時には可愛らしい姿で表現されている。ここでの二人は、空間の境目と空想という見えないものを可視化し創作している。以上 4 つのセクションを巡るとガラスという素材の可能性と作家達が創作に向ける無限の探究心とが融合しており、これまでと一味違うガラス作品の世界が垣間見える楽しい展示であった。

本当は、まだまだ紹介したかった展覧会があるが紙面が尽きてしまった。今回、各展覧会を見て、地方都市の美術館でもコロナ以前の活発な状態に戻りつつあるのだと感じた次第である。



高岡市美術館「ウィリアム・モリス 英国の風景とともにめぐるデザインの軌跡」展 (3 月 18 日～5 月 7 日) 会場風景



富山市ガラス美術館「アナザーワールド：不思議でリアルな世界」展 (3 月 4 日～6 月 18 日) 会場風景 写真は今井瑠衣子作品

美術館の外で、美術館の中で

鈴木俊晴(すずき としはる・豊田市美術館)



このところ愛知を中心に目立って見えるのは美術館の外での非営利やオルタナティブなスペースの活動である。たとえば2022年の秋からの半年を振り返るとき、すぐに思い出されるのは、1960年代に造られた公営団地と近くの幼稚園を舞台とした「瀬戸現代美術展2022」(9月17日～10月23日)。瀬戸市の中心部にギャラリーとカフェを兼ねたスペースを営む近藤佳那子と古畑大気のアーティスト二人が主催したこの展覧会は、同市に住まう作家たちや地域とのゆるやかな連帯によって生み出されたもので、予算を部分的にクラウドファンディングでまかなった点も含め、非常に意義深い試みだった。同じ名古屋市内では(9月の開催ではあったが)彫刻家の鈴木孝幸が新城の廃校でグループ展の企画を毎年続けているし、三河湾を臨む温泉街では「ととう温泉美術館」(1月21日～2月19日)が新しく催され、安城の再開発地区にはEight Art Houseが現れるなど、郊外こそが面白いと思っていれば、名古屋市内でも年度末に向けて、熱田神宮脇の横丁の一角に渡辺英司が(これでもう何回目になるだろう)独自の展示スペース jingu339 を新設し、中川区にはこの地域のインストールチームとしてはすでに欠かせない存在になって久しいミラクルファクトリーと東南アジアの美術に通じる鈴木一絵(SEASUN)によるQ SO-KO がオープンしている。名古屋市のアーツ・カウンシル構想を置き換えつつ新しく立ち上がったクリエイティブ・リンク・ナゴヤの助成を受けた鷺尾友公による北区尼ヶ坂

あたりを舞台とした「三月のメロディ」(3月18日)など、地域に根差した活動も興味深いものだった。港区のMAT, Nagoyaでの長島有里枝の長期間の滞在をベースとした展覧会も忘れられない。一時期に比べると名古屋都心のコマmercial・ギャラリーは数も活動量もいささか低下気味の感があるが、ここにきて美術館とギャラリーの回路とは異なる場所が増えているのは率直に嬉しい。そこにはおそらく、名前を変えたとはいえ、すでに10年以上継続されている「トリエンナーレ」のもたらす恩恵もあるだろう。様々な人々が交流し、この土地に留まるきっかけとしても3年おきの芸術祭は機能しているようだ。

名古屋造形大学のギャラリーでの「拠点から一有馬かおる(キワマリ荘)と設楽陸(タネリスタジオ)展」(12月9日～12月25日)は、そうした流れに時宜を得た企画で、二人の作品のイントロとしてはあまりに長大なこの地域のオルタナティブな活動をまとめた年譜(高橋綾子編)を掲げていた。近年とりわけ愛知県美術館が地域にゆかりの前衛活動を取り上げる小企画が続いているが(2022年度下半期には「生誕80年 あさいますおー不可視の後衛」展(10月29日～12月25日))、かつて長者町にあった8号室や伝説的なオルタナティブ・スペースのICA, Nagoyaなど、そして将来的にはここに記したような事例を含めて、この地域のアートシーンを形成したスペースや活動を振り返るような調査や展示を行うことが美術館の役割として今後

比重を増していくだろう。

ということでようやく美術館に目を向けて、印象的だった展覧会をいくつか。三重県立美術館の「岡田米山人と半江展」(9月23日～11月6日)は同館の開館40周年を記念する展覧会として、同時開催の「生誕100年 元永定正展」(9月6日～12月11日)とともに、時代は異なるものの大阪や神戸へと通ずる独自の文化圏のありようを示す絶妙な組み合わせだった(加えて、三重県総合博物館の「三重の円空」展(10月8日～12月4日)は志摩で描かれた円空の絵図を特集しており、岡田父子、元永、円空と味わいのある絵が津に居並んでいたのはなんとも痛快だった)。ところで2021年の長野県立美術館の開館あたりから、中央道で飯田から諏訪、松本、上田、そして長野をまわる機会が増えている。となると岐阜の多治見から中津川も通り道になってくる。土岐市美濃陶磁歴史館は近年地道な調査に基づいた好企画が続いているが、「中上良子 陶磁器デザイナー・エマイユ作家として」展(8月13日～11月13日)もまた、近年の女性作家への関心の高まりに同期する展覧会だった。同館は建物の新設を検討しているとのこと。中央道沿いの目的地としてこれからの展開が楽しみである。

最後にコロナにまつわる報告を。ほとんどの施設において2023年の春までには展覧会活動はコロナ以前の通常運転に戻っていたようで、豊田市美術館の「ゲルハルト・リヒター」展(10月15日～1

月29日)、愛知県美術館の「展覧会 岡本太郎」(1月14日～3月14日)など積極的な集客を見込むような展覧会も特段の制約を受けることなく盛況な様子がみられた。各種イベントはそれに遅れて回復しつつあるところだろうか。私が勤める豊田市美術館では教育普及プログラムの一環として作品ガイドボランティアによる対話型の鑑賞を長年推し進めていたが、展示室内での対話を前提とするこのプログラムも、コロナによる制約が強く設けられていた時期には休止したり、展示室から講堂へと場所を変えて行わざるを得なかったりと、理想とは程遠い活動を強いられていた。ようやく2022年の6月に展示室内でのツアーを再開すると、今年1月末までは無線通信機器を用いての一方的な語りかけというかたちに限られたが、以降は従前の対話を通してのツアーへと復帰することができている(学校受け入れのプログラムでは2022年春には展示室内での対話を再開していた)。この3月にはコロナの5類移行が段取られ、すでにその時点で展示室内でマスクをしていない来館者も散見されるようになった。少なくとも見た目的にはもうしばらくでコロナ以前の美術館風景が戻ってくるだろう。とはいえ、この原稿を書いている時点ではまだ「新しい日常」と「新しい新しい日常」の端境といったところで、私たちの社会や生活がこの数年間に被った変化のその先はまだまだ見通せない。ひとまずはマスクをせずに美術作品に臨み、隣の人と言葉を交わせるようになったことを素直に喜んでおきたい。



「瀬戸現代美術展2022」会場風景 写真は栗木義夫作品
撮影：城戸保



愛知県美術館「生誕80年 あさいますおー不可視の後衛」
会場風景 撮影：谷澤陽佑 写真提供：愛知県美術館

日常としての美術館 —近畿圏の個性的な展覧会を巡って

林野雅人 (はやしの まさと・大阪中之島美術館)



昨秋以降の新型コロナウイルス感染症の水際対策緩和により、関西周辺でも訪日客の姿が日に日に多く見られるようになった。国内旅行もコロナ前の水準に徐々に近づきつつあるようで、美術館も通常運転となってきたようにも見える。だが、コロナの次は物価高騰である。各館どこも苦しい内情は同じではないだろうか。とりわけエネルギー価格の高騰は光熱費の増加を招いており、印刷費の上昇も身をもって感じている。収支を合わせるために、一本の展覧会会期を長くし、年間の本数を抑える館も増えていると聞く。そうすると長期間展示に向かない日本画や版画などの展覧会はどうしても開催が難しくなってしまう。また、これらの経費は徐々に観覧料に上乘せされるようになってきたようにも感じる。条例などで上限金額が定められている公立館では、急な値上げは難しいだろうが、確実に平均値は上がっている。

さて、2022年度下半期の近畿ブロックでは各館個性的な展覧会が開催されたが、その多くは時間指定の必要はなく（あっても優先制となっている）、鑑賞を思い立った時に気軽に足を運べるコロナ前の美術館に近い状態となったといえる。まずは鑑賞のハードルが幾分下がった気がする筆者が勤務する大阪の展覧会について紹介したい。

大阪中之島美術館では、昨年2月の開館以来初めてとなる日本画展「開館1周年記念特別展 大阪の日本画」(1月21日～4月2日)を開催した。これは展覧会名が示すように、これまでの日本美

術史では取り上げられることが極めて稀であった近代の大阪に芽生えた日本画を紹介する取り組みであった。大阪の人口が東京を抜いて日本一となった昭和初期の「大大阪の時代」に中堅画家として大阪の日本画を牽引した北野恒富、菅橋彦、矢野橋村の活動、従来から大阪に根付いていた文人画や船場派（大阪の四条派を指す言葉として、本展ではこのように称した）の作品群、そしてもう一つの大阪の特徴である女性画家たちの作品などを網羅的に紹介した。同時期に開催を予定していたアメリカの現代美術家サラ・モリスの展覧会は、輸送費の高騰や国際情勢の影響により開催を延期せざるを得なくなった。開館1年目から展覧会が飛ぶことは想定外であり、大規模な海外輸送を伴う展覧会は依然として一筋縄ではいかない現状を、身をもって感じた。

ところで、個性的な作家を紹介したのが京都国立近代美術館の「開館60周年記念 甲斐荘楠音の全貌—絵画、演劇、映画を越境する個性」展(2月11日～4月9日)である。甲斐荘は大正から昭和にかけて美しさと醜さが入り混じった生々しい女性像を描き、国画創作協会を中心に活躍した日本画家として知られる。この度の展覧会では1940年代に映画界に転身した彼の後半生にも光を当て、一人のアーティストの生涯を伝える試みであった。なかでもスクラップブックや写真に加え、近年発見された彼が手がけた時代劇衣装は、衣装・風俗考証家として時代劇映画の黄金期を支えた甲

斐荘の知られざる側面を質と量で紹介していた。

一方、同じ岡崎にある京都市京セラ美術館の「アンディ・ウォーホル・キョウト」展(9月17日～2月12日)は観客動員数24万人超となり連日多くの観客でにぎわい、図録も完売した。ウォーホルといえば、鳥取県が新美術館の目玉として約3億円で購入した《プリロの箱》が全国的に話題となったが、このことも影響したのか否かは不明だが、国内巡回はなく京都だけで開催された本展には若年層からシニアまで幅広い世代が足を運んだようだ。

ユニークな企画だったのは、兵庫県立美術館の「恐竜図鑑—失われた世界の想像／創造」展(3月4日～5月14日)だ。一般的な恐竜展では化石や骨格標本などが主役であるが、本展の主役はパレオアート(古生物美術)。生きた姿を誰も見たことのない恐竜を描いてきた約200年の歴史をたどるのだが、空想の世界であった恐竜が、発掘や科学的調査によって徐々に姿を変えていく様もまた楽しむことができた。

最後にコレクションを紹介する展覧会から、滋賀県立美術館で開催された「シュウカツ！」展シ

リーズに触れておきたい。同館ではリニューアルの休館中にも作品の収集活動を継続してきたことから、展覧会や教育活動と比べると一般の方には見えにくい「収集活動」や「修理活動」をテーマとして「シュウカツ！」と題し、近年収集したコレクションを中心に順次公開している。2022年度下半期では、「護る、伝える、保存修理活動」(11月29日～1月29日)と「収集活動より—女性を描く中村貞以—」展(1月31日～3月12日)が開催された。前者では近年修復した作品と修復で使用する材料や技術を併せて展示し、美術館が作品を展示し、後世に伝えるための活動としての修復を紹介。また、中村貞以展は、休館中に寄贈を受けた貞以の初期から晩年にかけての複数の優品コレクションを修復などの必要な処置を施し紹介していた。リニューアルを経て同館が着実な活動を続けていることを強く印象付けるものであるといえよう。

リニューアルといえば、現在大阪市立美術館が改修のため休館しているが、そのため日展がはじめて神戸で開催されたことも近畿ブロックのニュースとして記しておく。



大阪中之島美術館「開館1周年記念特別展 大阪の日本画」会場風景



収藏品展に注目して

中村麻里子(なかむら まりこ・ふくやま美術館)



コロナ禍も下火となり、再び実際の展示を見てもらえるようになった現在、各館の展覧会担当者は、展示構成におけるアイデアや企画力にさらに磨きをかけようとしているところだろう。筆者は20年以上勤めた岡山県立美術館を2022年3月末で退職し、ふくやま美術館に勤務するようになって早1年になる。岡山県倉敷市から広島県福山市へと越県通勤をさせてもらっていることで、少し視野が広がったような気がするものの、なかなか各館を訪れる余裕が無い。そのような中、2022年10月から2023年4月の間に訪れて見た、しかも収藏品を活用した展示を紹介し、各館の活動の様子を振り返ってみたい。

まずはじめに岡山県立美術館の収藏品展について。2022年度第4期展(9月7日～10月2日)の一角で、「生誕110年記念・塩出英雄と仏画展」が開催されていた。塩出は日本画家の道一筋に進んだのではなく、仏教とくに真言密教に深く帰依し、短歌や茶道にも精通していた。自身の作画について「仏画を描くつもりで山水を描いている」と語った塩出の日本画と、館収蔵の仏画を一堂に並べた新しい切り口が新鮮な印象である。また第7期(1月5日～2月12日)、「没後100年 林皓幹展」の特集コーナーも興味深かった。2004年、遺族宅から借用した皓幹資料を館蔵品とともにまとめて展示したのが初めての皓幹展であったが、今回は遺品を丁寧に整理・調査した担当学芸員が、作品の原点となった資料やヒントになるものを作品と合

わせて紹介しており、19年ぶりの新たな発見もあった。その他第3期(7月16日～8月28日)「倉敷・大原家伝来 浦上玉堂コレクション受贈記念特別展示」、「佐藤一章」展、第5期(10月4日～11月6日)の「竹内清展」など、個々の作家を新たな角度から紹介し、見る人の興味を引き付ける工夫がなされていた。

林原美術館では、同館収藏品の大きな柱である大名池田家伝来品が、展示品の多くを占める。「古美術ことば辞展」(7月1日～9月4日)は、「相槌を打つ」「お墨付き」「折紙付き」「自画自賛」「しぎを削る」「切羽つまる」「つばぜり合い」「登竜門」「七つ道具」といった国語辞典に載ることばを切り口に、刀剣や装束、書画など様々なジャンルの作品を紹介するもの。担当学芸員によると「ここ数年、収藏品に接する機会毎に『あっ、この言葉が使えな』とひらめいた際のメモを蓄積しておき、それらをまとめてやっと展示に実現できた」とのこと。アイデアと日頃の発見、それらの積み重ねが大切だとつくづく感じた。「薫香のたしなみ」展(1月14日～3月26日)も、仏教美術や婚礼道具、文学と関連づけた香道具など興味深かった。

東広島市立美術館では同館収藏品と広島市現代美術館コレクションとのコラボ展示「びじゅつの謎をあそぶ。展」(12月8日～1月15日)が開催されていた。広島県立美術館でも「ケンピとケンピの作品を並べたら美術についての疑問が解ける(かも)展」(10月29日～1月22日)が開催されるなど、

大規模改修工事に伴い長期休館中の広島市現代美術館が、2つの館で合同展示をするという、近隣館同士の積極的かつ協力的な姿勢がすばらしいと感じた。東広島市立美術館では、鑑賞者に語りかけるようなキャプションが親近感を呼んでいた。

また同館の「笠間日動美術館珠玉のコレクション 近代西洋美術の巨匠たち—モネ、ルノワールからゴッホ、ピカソまで」(2月14日～3月26日)の第2章において、笠間日動美術館が所蔵する大津絵コレクションと、東広島市立美術館所蔵のジョアン・ミロ作品とのコラボ展示が行われていた。江戸時代の民衆絵画「大津絵」についてミロが注目していたという関係から、両者を並べて展示するというもの。意外な組み合わせが新鮮に感じた。

最後にふくやま美術館について紹介する。2022年度冬季所蔵品展「戦後日本美術の前衛—具体美術を中心に」(12月21日～3月26日)では、当館所蔵の吉原治良や白髪一雄、田中敦子ら具体グループの作品に続けて、ナウム・ガボやルチオ・フォンタナらの抽象表現作品を含む計34点を展示した。2022年はちょうど「具体」の解散か

ら50年という節目に当たり、大阪中之島美術館と国立国際美術館の2館連携で「すべて未知の世界へ—GUTAI 分化と統合」展(10月22日～1月9日)が開催されたほか、各地の美術館で「具体」が取り上げられていた時期である。本展開催に際しては、当館における具体作品の位置づけを見直す良い機会となった。

続いて2023年度春季所蔵品展「大正アート・デモクラシー—個性の時代の美術」(4月6日～6月25日)は、資本主義が発達し個性の尊重が叫ばれた「大正時代の美術」に着目した展示。竹久夢二に始まり、南薫造、岸田劉生と、当館の収藏品を中心とした約60点が並ぶ展示室内は、わずか15年間にこのように多彩な展開を見せる大正アートのおもしろさが詰まっている。当館では年に春夏秋冬の4回、各担当学芸員がしっかり練り上げた企画を、2階展示室の一角に繰り広げる。直近の夏季所蔵品展「ワレモノ注意!—美術の世界の「ワレモノ」たち」(6月29日～9月3日)では、金継ぎや焼き継ぎなどの修理方法や、割れていることを生かした作品などを楽しく紹介した。



林原美術館「古美術ことば辞展」会場風景

子ども達とミュージアム

鹿間里奈(しまりな・香川県立ミュージアム)



新型コロナウイルス感染症の感染状況も落ち着きはじめ、社会全体でコロナとの関わりあいが見直されてきている。香川県立ミュージアムでも、2022年度はコロナによる休館やイベントの中止もなく、展覧会や関連イベントを実施することができた。当館では、年明け以降は県出身の彫刻家・藤川勇造の生誕140年を記念した「生誕140年 藤川勇造」展(1月24日～4月16日)のほか、県出身の猪熊弦一郎と川島猛のニューヨーク時代の作品を紹介する「DREAM LAND -猪熊弦一郎と川島猛」展(2月14日～5月14日)を開催した。年明けから春にかけて、様々な企画展等が四国の他県でも開催され、季節や作家といった様々な切り口でのコレクション展示がみられた。展示からは県や館の特色などに加え、各館における学校や子どもに対するアプローチも見えた。

愛媛県美術館では、「追悼 白川義員写真展『天地創造』」(1月14日～3月12日)やコレクションを使用したアートカードで取り上げた作品を紹介する「アートカード100!」展II(2月8日～4月9日)が開催されていた。「アートカード100!」展IIでは、展示室内に作品を見るときヒントを紹介する看板、屏風を座って観るための畳が設置されるなど、鑑賞の取っ掛かりとなる仕掛けがみられた。鑑賞のヒントは、「じっくり作品を見る」や「ほかの人の考えを聞いてみる」といった、子どもだけでなく同伴する保護者も一緒に楽しめるようになっていた。さらに、作品の高さも低めに設定されている

など、子どもが鑑賞しやすい細やかな工夫がされていた。また、コロナで鑑賞機会の減った子ども達を対象としたバスツアーも企画され、子ども達は楽しみながら作品にふれたようだ。

徳島県立近代美術館は、「徳島のコレクション2022年度 第3期」展(11月12日～4月9日)が開催され、徳島ゆかりの美術が紹介されていた。展示では作品と共に作家が手掛けた装幀や挿絵、ポスターなどもあわせて紹介されていた。この会期中には絵を描きながら展覧会を鑑賞する「こども鑑賞クラブ」が開かれるほか、毎月1回保育園と美術館が連携する「アートの日」の活動発表展も行われていた。この「アートの日」は2012年から続けられており、継続することの大切さを感じた。

高知県立美術館では「テオ・ヤンセン展」(4月15日～6月25日)が開催されていた。会期中には定期的に展示品を動かすイベントも開催され、多くの来館者がその様子を見たり撮影したりしていた。また、「ケンビでお花見」展(3月25日～5月24日)やNHKテレビ小説のモデルにもなった高知県出身の植物分類学者・牧野富太郎にちなんだ「石元泰博・コレクション展 HANA / 牧野富太郎記念館の建築」展(4月15日～8月20日)も開催されている。そして、「テオ・ヤンセン展」にあわせ、小学生を対象としたワークショップの開催や、高知県内の教職員が企画展やコレクション展を無料で観覧できる「ティーチャーズ・ウィーク」が設定されている。

来館した子どもが鑑賞を楽しむための工夫、イベント開催や学校・保育所へのアプローチといった来館のきっかけづくりなど各館の子どもとミュージアムの関わり方への取り組みがみられた。

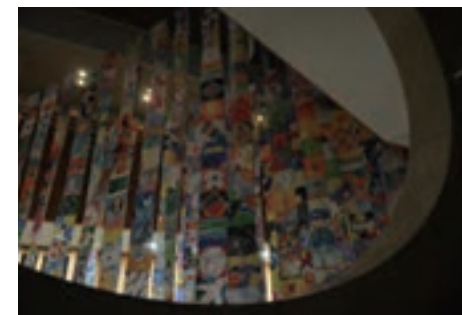
さて、香川県立ミュージアムでは、「第69回日本伝統工芸展」(1月2日～1月16日)を年明けに開催し、コロナの影響で中止となっていた小学校高学年を対象とした漆芸技法の体験ワークショップを3年ぶりに実施することができた。また伝統工芸展の会期にあわせて、県下の中学生が参加した「オニノコプロジェクト」の展示とワークショップも開催した。「オニノコプロジェクト」は香川県中学校美術教育研究会との共同事業で、当館を会場とした展示は5回目である。2022年度は県の伝統的工芸品「讃岐のり染め」を参考に中学生が制作したのり染めをエントランスの吹き抜けに吊り下げた。そして、会期中には中学生達自身が企画したワークショップを開催した。一般の来館者

が訪れるミュージアムで活動することは子ども達にとって刺激になったのではないだろうか。参加した学校の先生からは、他の人に教えるという経験や家族や学外の人達とのコミュニケーションは貴重な経験となり、生徒達の普段とはちがう一面を発見することもできたとの感想もいただいた。ワークショップ中には中学生が「第69回日本伝統工芸展」を鑑賞するなど、ミュージアムを子どもの活動の場にすることで、少しでもミュージアムというものを身近に感じてもらうきっかけにもなったと考える。

子どもや学校に館に来てもらうあるいは、コレクションを知ってもらうための工夫など各館それぞれに子どもに対してアプローチがなされている。アフターコロナの中で来館者に加え、学校団体の見学も少しずつ戻りつつある今、子ども達どのように関わっていくのか、ミュージアムが子ども達にとってどのような役割を担えるのか考えていけたらと思う。



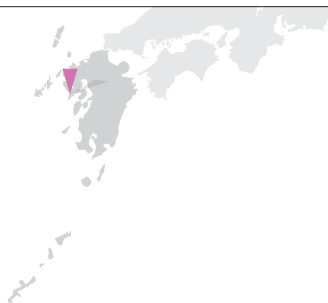
愛媛県美術館「アートカード100!」展II 会場風景 写真提供:愛媛県美術館



香川県立ミュージアム「オニノコプロジェクト」会場風景

数年後の展覧会計画、 皆さんどう立てていますか？

森園 敦(もりぞの あつし・長崎県美術館)



研究紀要を年度末に海外郵送(船便)するというので、輸送業者に見積りを取ったところ、コロナ以前のちょうど10倍という金額で大変驚いた。とりあえず令和4年度の発送は取りやめ翌年度に2冊まとめて送ることにしたものの、1年後は果たしてせめて5倍くらいまで下がってくれるのだろうか。

コロナ禍、急激な円安、それに伴う物価の高騰など、様々な要因に翻弄されるのは仕方ないことなのだろうが、先があまりにも読めない状況というのは困ったものである。輸送費が経費全体の半分以上を占める海外展の場合は特に、先が読めないと収支計画を立てることができない。1年後は元に戻らないとしても、3年後にはコロナ以前と同じくらいの見立てでいいんじゃないかという楽観的な考えでは、一緒に展覧会を作っていくというパートナーは現れないのである。これまではある程度見通しのつく未来予想図をもとに展覧会を仕込んできたのだという当たり前のことを改めて思い知らされている。経費を切り詰めてかつかつの分損金設定をしても、実際にそれで賄えなかった場合、果たしてどこがそれをかぶってくれるのだろうか。最近よく言われる「元に戻る」という言葉は個人的には全く信じることができない。

そんななか私の所属する長崎県美術館では、4月から「スペインのイメージ：版画を通じて写し伝わるすがた」(4月8日～6月11日)という版画展を開催した。本展は国立西洋美術館の企画によるもので、両館のコレクションを軸に、日本国内に

所蔵される作品のみで構成されたものである。監修者の川瀬佑介氏は「国内のみ」という点にこだわり、美術館、個人を問わず丹念に国内作品を探索し200点以上を集めた。実際の展示を見ると、海外からの作品を抜きにここまで体系的にスペインにまつわる版画芸術を味わえることに少なからず驚いた。限られた枠組みのなかでも十分な見応えを提供できた好例であろう。

さて、まず九州にまつわる話として挙げるべきは、九州生まれの画家・野見山暁治と写真家・奈良原一高の展覧会だろう。そのもととなったのが、まったくの偶然であろうが、ここ数年前からほぼ同時期に両者の作品が九州に限らず全国のゆかりの深い美術館に寄贈されたことである。昨今、それらが各地の美術館のコレクションルームなどで展示されていることは特筆に値する。特に福岡県立美術館で開催された「寄贈記念展 野見山暁治」(12月17日～2月12日)は、近年寄贈された37点の作品を中心とした所蔵作品のみにもかかわらず、20代から最新作まで100歳を超える画家(2023年ご逝去)の全貌を辿ることができるほどの充実ぶりであった。野見山作品の紹介は都城市立美術館、長崎県美術館、そして久留米市美術館などでも行われた。

奈良原一高については、福岡市美術館に6つのシリーズから成る200点以上もの作品が寄贈され、すでに順次公開が始まっている。長崎の軍艦島と桜島の黒神村を撮影したデビュー作「人間の土地」

もさることながら、戦後日本に残る戦争の痕跡と風化をより鮮明にとらえた「無国籍地」を九州で見られるようになったことはうれしい。

熊本市現代美術館で開催された「坂口恭平日記」展(2月11日～4月16日)は、コロナ以後の社会を反映した新鮮な展覧会であった。坂口はまさに日記を付けるように日々畑を耕しながら、風景を写真撮影し、それをパステル画へと仕上げ、さらに音楽や文筆活動をも展開していく。その創造活動は自然体で、自分自身に無理を課することがないため、湧き出る泉のごとく大量の制作物が展示室を埋めていた。コロナ禍を機に生活を変えた坂口の気負いのない制作活動は、コロナ以前を追い求めるを得ない大多数の人々に、生活の新しいあり方を提案したといえる。

2017年に「リアル(写真)のゆくえ」展が全国巡回したのは記憶に新しいが、その第2弾が九州で初めて開催された。久留米市美術館である(2月11日～4月2日)。西洋から移入された油絵による写真、それとは別に松本喜三郎らの生人形に見る日本にすでに存在していた写真、それらが明治維新を契機に出会い、日本独自の写真が芽吹き始

める。展覧会では生人形だけでなく、義手や義足までが展示され、リアルを追求することが必ずしも芸術の場だけではないことを気付かせてくれた。巡回展ではあるが、近代日本美術の優れた展覧会を開催し続けている久留米市美術館だからこそ、この斬新な焦点の当て方は意義あるものだった。

全体的にみると、コロナ以後に計画された展覧会が開催されているためか、大型展はいまだ数少なく、その代わりにそれぞれの館のアイデンティティを再確認するような展覧会が増えたように見受けられる。ただ肝要なのは、そのアイデンティティが地域住民とどこまで共有されているかであろう。ギャラリートークや講座などが再開され、ようやく人前でしゃべる機会が増えてきた昨今、我々はより意識的に自分たちの美術館のことを熱く語っていく必要があるだろう。

2022年度下半期は残念ながら大分、宮崎、鹿児島には出向くことができなかった。「日本最短」と揶揄されながらも長崎では西九州新幹線が昨秋開業し、他県に行くことが少しだけ容易になった。2023年度は精力的に見て回りたい。



熊本市現代美術館「坂口恭平日記」会場風景 写真：山中慎太郎(Qsyum!)

NO. 1

女子美術大学美術館

〒252-8538 神奈川県相模原市南区麻溝台1900



女子美アートミュージアム
TEL: 042-778-6801
FAX: 042-778-6815
E-mail: bsk@venus.joshibi.jp

[開館時間]
午前10時から午後5時まで(入館は午後4時30分まで)

[休館日]
日曜日、祝日、展示替期間(ただし展覧会に応じて特別開館あり)

[開館時期]
2001年10月

女子美ガレリアニケ
〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8
TEL: 03-5340-4688
FAX: 03-5340-4683

[開館時間]
午前10時から午後5時まで

[休館日]
日曜日、祝日、展示替期間(ただし展覧会に応じて特別開館あり)

[開館時期]
2012年4月

女子美術大学美術館は、女子美術大学の付属機関として相模原キャンパスの女子美アートミュージアム(略称:JAM)と杉並キャンパスの女子美ガレリアニケの2施設で構成されている。1990年に図書館に併設する形で開館した女子美術大学美術資料館を前身とし、何度かの組織変更を経てJAMは2001年、ガレリアニケは2012年より現在の形となった。

JAMでは、コレクションを中心とした自主企画展をはじめ大学の学科・研究室との共催による特別展、海外の美術大学との交流展、相模原市と大学の文化促進協定の一環として市立小中学校児童生徒作品展など年6本程度の展覧会を開催している。ガレリアニケは、「社会とつながる」をテーマに、本学に関連する若手作家を取り上げる「ニケキュレーターズセレクション」やベテラン作家を顕彰する「女子美スピリッツ」など年間約8本の展覧会を開催している。また両施設とも、毎年開催される退職教員展や大学院の修了制作展の会場ともなっている。

当館のコレクションは美術工芸と染織品の2部門に分かれており、前者は大久保婦久子・片岡球子・郷倉和子・多田美波・三岸節子をはじめとした本学出身の作家や、河鍋暁翠・芳沢銈介ら教員経験者など本学にゆかりの深い作家の作品を中心に約4,000点を収蔵している。分野は絵画彫刻、工芸デザインはもとより、大学の学科編成を反映

して映像やメディアアートにも広がっている。染織部門は、2009年に旧カネボウコレクションの一部を所蔵したことにより約12,000点に上る国内最大級のコレクションとなった。エジプトのコプト裂をはじめ、アンデスの染織品、ペルシャの紋織物、インドの更紗、インドネシアのイカット、日本の小袖など、古代から現代までの世界各地の染織品を網羅しており、芸術的価値のみならず学術的にも価値の高いものとなっている。

当館は、女子美術大学の機関として女性による美術制作の発表、大学における教育・研究の成果の公開・発信を使命としている。また同時に、市民との触れ合いを深め、地域の芸術文化振興に貢献することも活動方針の一つとしており、それぞれの施設が地域社会の人々に親しまれる場となることを目指している。(荒木和・あきなぎ)

NO. 2

慶應義塾大学アート・センター

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45



TEL: 03-5427-1621
FAX: 03-5427-1620
E-mail: ac-office@art-c.keio.ac.jp

[開館時間]
午前11時から午後6時まで

[休館日]
土曜日、日曜日、祝日

[開館時期]
1993年7月1日

1993年に開設された慶應義塾大学アート・センター(KUAC)は、慶應義塾大学に属する研究所のうち、最初に芸術を専門的に扱う場所として誕生した。以来30年間様々な活動を行ってきたが、そこでは戦後芸術を中心としつつ総合大学の領域横断性をいかしながら、特定分野や思想、理論体系に偏らず、現代社会における芸術活動の役割をテーマとしてきた。その特徴を挙げるならば、理論研究だけでなく実践活動も行っており、アーカイブと展覧会の両輪を基本に多種多様な活動を展開している点である。

土方巽をはじめとした所管のアート・アーカイブでは、その整理作業における資料体系の構築と同時にアーカイブ理論研究も行っている。KUACでは開設5年後から資料群を受け入れて先駆的にアーカイブ研究に取り組み、現在では13のアーカイブを所管して理論研究と整理・構築・公開を進めている。パフォーマンスやイベントなどのように資料を通してのみ存在が伝えられるエフェメラルなアートを記録するだけでなく、学内建築を利用者の視点からアーカイブするなど、基礎的なものから実験的な手法まで、多くのアプローチでアーカイブ活動を実践してきた。さらにそこでの成果をKUAC設置講座における大学教育に還元すること

で、アーカイブ活動自体のノウハウを伝えるだけでなく、過去を知り現代を問う姿勢を養うことに取り組んでいる。

KUACは2002年に発足した慶應義塾大学の美術品管理運用委員会の事務局を務め、学内コレクションの保存修復、貸し出しといった保守管理も担っている。学内各所で展示活動を展開するだけでなく、2011年より常設の展示室を開設し、2013年には東京都から博物館相当施設の指定を受けることで、大学ミュージアムとしての機能も果たしてきた。開催する展覧会の内容も施設の特性を反映しており、現代美術の展覧会から学内作品の保存修復をテーマにした展覧会やアート・アーカイブの研究成果展示まで、幅広い範囲で展示活動を展開している。一室のみの展示室であることをいかし、作品や資料、そしてそれを通して制作者により接近し、生の手触りや息遣いを感じられるような親密感のある空間を提供することが特徴である。

かねてよりKUACでは各種公開イベントや発信活動を通じて地域との連携にも力を入れており、研究成果や新たな視点を、地域コミュニティなどを中心に共有してきた。近年こうした活動は大学やミュージアムにより要求されており、KUACでも展覧会を開催するだけでなく学内外で建築や彫刻を鑑賞するツアーを開催するほか、地域文化を掘り起こす活動にも力を入れている。

アーカイブや展覧会事業における、領域横断的な理論研究と実践を並走させることでさらなる思考の種を生み出す。こうしたKUACの幅広い活動を可能にするのは、常にいくらかでも前に踏み出すという挑戦的精神である。それらは相互に関連しあいながら、芸術の今日の意義を問うものとなっていくだろう。(新倉慎右・にいしんすけ)

半蔵門ミュージアム

〒102-0082 東京都千代田区一番町 25



TEL: 03-3263-1752
FAX: 03-5212-7203
E-mail: hanzomonmuseum@hanzomonmuseum.jp

【開館時間】
午前10時から午後5時30分まで(入館は午後5時まで)

【休館日】
月曜日、火曜日、年末年始

【開館時期】
2018年4月19日

交通至便な半蔵門駅に隣接する半蔵門ミュージアムは、真如苑が所蔵する仏教美術を一般に公開する目的で2018年に設立された、地下1階、地上3階の文化施設である。設計は平等院ミュージアム鳳翔館や国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館などを手がけた栗生明氏によるもので、積層する大理石(トラバーチン)の床・壁で構成された精神性の高い石室のような地下空間をもち、地上階は和紙張りのようなガラス壁面によって、昼は室内に柔らかな自然拡散光を行き届かせる設えである。地下展示室は「常設展示」と「特集展示」で構成されており、「常設展示」の〈ガンダーラの仏教美術〉エリアには、「誕生」「出城」「降魔成道」「初転法輪」「王の帰依と涅槃」などのガンダーラ浮彫が展示され、仏伝すなわち釈尊の生涯をたどって、仏教美術の基本を学ぶことができる。奥に進むと、重要文化財の大日如来坐像(鎌倉時代)が中央に安置される〈祈りの世界〉エリアに至る。この大日如来像は智拳印を結ぶ金剛界の像で木造、漆箔、玉眼を嵌入する。全体の作風に加え、X線写真によって確認される五輪塔形の木札や、仏像の魂といえる心月輪(水晶珠)などの像内納入品の形態や納入法、あるいは想定される伝来から、仏師運慶(?~1223)の作品と推定されている。〈祈りの世界〉

エリアには、さらに醍醐寺中興の祖・義演ゆかりの不動明王坐像(平安時代後期)、両界曼荼羅など密教世界を象徴する仏教美術が展示されている。また、彫刻や絵画、経典をはじめとする収蔵品のなかから、テーマ展示する「特集展示」を年に数回開催している。ほとんどの展示作品はケースに入れておらず、観覧者は、人々の祈りがこめられた仏教美術と直接静かに向き合うことができる。1階ギャラリーでは、当館の姉妹館である清里フォトアートミュージアムが所蔵する写真が展示される。2階には展示作品の詳細な解説パネルのコーナーを設置。ラウンジも併設している。3階には仏教文化に関する映像作品の上映を行うシアターがあり、ホールでは仏教美術や展示に関する講演会や、半蔵門という立地にちなんだ江戸歴史文化講座を定期的に開催している。全体を通じて仏教美術のみならず、歴史・文化や芸術に多角的な理解を深めてもらえる館を目指している。教育機関と連携した生徒・学生対象のプログラムや、千代田区主催の写真展に展示会場として協力するなど地域交流を通じた企画にも力を入れている。

(金森大資・かなもりだいすけ)

国立工芸館

〒920-0963 石川県金沢市出羽町 3-2



写真 太田拓実

TEL: 076-221-2020
FAX: 076-221-1969

【開館時間】
午前9時30分から午後5時30分まで(入館は午後5時まで)

【休館日】
月曜日(祝日の場合は開館し、翌日休館)、
展示替期間、年末年始

【開館時期】
2020年10月25日

石川県立美術館、金沢21世紀美術館など多くの美術館を擁する石川県金沢市の文化ゾーンの一 corner、本多の森公園に位置する国立工芸館は、石川県と金沢市の誘致により2020年10月に移転開館した。この一帯は兼六園や金沢城などの文化遺産も多数あり、まさに「工芸のまち」のど真ん中といえる。

この移転は、地方創生施策の一環として、東京一極集中を是正する観点から政府機関が地方への移転を検討するなかで誘致提案のなかに当館が含まれていたことから実現したもので、地元自治体が整備し準備した明治時代に建てられた旧陸軍第九師団司令部庁舎と旧陸軍金沢偕行社の2棟を使用している。窓枠などの外観は改修に伴う調査で判明した建設当時の色がそれぞれに再現され、往時の姿を知ることができ、貴重な建築物であるだけでなく可愛らしい色使いが建築ファンのみならず観光客の目を惹き、天気の良い週末は多くの人が楽しんでいる様子がみられる。

当館は東京国立近代美術館工芸館として1977年に東京都千代田区北の丸公園に開館して以来、19世紀末から現代に至る日本の工芸を中心に、広く国内外の工芸・デザイン作品を収集・保管し、展示会や教育普及事業などを通して、それぞれの素

晴らしさを紹介してきた。その基本的な方針は石川県金沢でも変わりはない。しかし今後はこの方針に加え、国際的に是正が求められているジェンダーバランスや地域性等の多様性やナショナルコレクションにふさわしい同時代収集についてこれまで以上に配慮することが喫緊の課題として挙げられる。例えば展示替期間、年末年始、これまでの企画展で主眼としてきた20世紀における工芸領域の多様な活動の回顧だけではなく、再評価を必要とする工芸家の回顧展をはじめ、まさに「旬」といえる今日的な表現活動をクローズアップする試みも見据えている。近年は、工芸や美術という領域の枠では捉えきれない新たな作品世界が築かれ拡大しつつあるので、一瞬の変化にも遅れをとらないために、常に新しい動向に注目し、その魅力をしっかり伝えていきたいと考えている。石川・金沢という地は工芸文化に理解が深いうえ、文化観光を目的とした観光客も多いため、多くの期待を背負いながら前向きに活動している。アートライブ러리やミュージアムショップも充実させ、展示だけでなく資料調査やグッズ購入でも利用いただけるよう整えた。これからも工芸の奥深さを伝えつつ、敷居の低い、ふらっと立ち寄り楽しんでいただける美術館でありたい。

(岩井美恵子・いわいみえこ)

「アートの中でアートを観る。」をテーマに、建築も楽しめる美術館

下瀬美術館

〒739-0622 広島県大竹市晴海 2-10-50



©SIMOSE

TEL: 0827-94-4000
FAX: 0827-94-4100
E-mail: info@simose-museum.jp

【開館時間】
午前 9 時 30 分から午後 5 時まで
(入館は午後 4 時 30 分まで)

【休館日】
月曜日 (祝日の場合は開館)、
年末年始、展示替え期間

【開館時期】
2023 年 3 月 1 日

下瀬美術館は 2023 年 3 月に広島県の最西端の都市、大竹市に開館。広島市に本社を置く建築資材の総合メーカー丸井産業株式会社が、2018 年の創業 60 周年を契機として、これまで広島地域や産業・経済界などから受けてきた恩顧に感謝し、公共の福祉に貢献することを目的として設立の構想が本格化した。

施設の建築にあたっては、広島県民や全国及び海外からの観光客が気軽に鑑賞し、学び、美術に親しく交わっていただく場をめざし、世界で評価されている建築家・坂茂氏に設計を依頼。枝を広げた大木のような柱が印象的な、明るく開放感のあるエントランス棟や、水盤に並ぶ 8 つのカラフルなキューブ状の「可動展示室」など、瀬戸内海を見渡せる広大な敷地に世界に類を見ない建築を実現した。また、宮島をはじめとする瀬戸内の島々を一望できる展望エリア「望洋テラス」や、所蔵作品のモチーフとなった草花に出会うことのできる「エミール・ガレの庭」なども併設し、四季折々の自然も楽しめる施設になっている。

美術館のコレクションは、丸井産業株式会社の代表取締役である下瀬ゆみ子が先代の創業者から受け継ぎながら半世紀以上をかけて少しずつ形成してきた約 500 点。このコレクションは、子どもの成

長と平和な世の中を祈って集められてきた京都の大木平蔵(丸平大木人形店)の雛人形や雛道具、御所人形から始まり、その後、日本近代や西洋の絵画、工芸へと広がる。人形では、平田郷陽や四谷シモンの作品、日本画では、竹内栖鳳や横山大観、東山魁夷、加山又造の作品、油彩は、浅井忠や梅原龍三郎、佐伯祐三、小磯良平、香月泰男の作品が揃う。西洋工芸では、エミール・ガレのガラス作品や家具を中心に、西洋絵画では、ミレー、ピサロ、ルソー、マティス、シャガールといった巨匠たちの作品も重要な位置を占める。開館記念展では、企画展示室にてコレクションの原点である雛人形や御所人形、雛道具を中心に初公開するとともに、可動展示室では展示室ごとにテーマを設け、下瀬コレクションの多様な作品を展示した。

地域連携や教育普及活動にも力を入れており、美術館に隣接する大竹市の公園と連携し、気軽に往来ができるように道路を繋げたり、地域社会との関係を重視し、観覧料に市民割引料金を設けている。また、市や教育委員会と連携し、地元の特産品である大竹和紙を使用したワークショップなどの教育プログラムも実施している。

(吉田帆香・よしだほのか)



美術商

日本画・洋画・工芸

代表取締役 浅木正勝

〒101-0021 東京都千代田区外神田 5-4-8

TEL. 03-3831-7821 FAX. 03-3831-7771

<https://www.marueido.com>

美術品輸送40年以上のノウハウと実績が紡ぐ安心。

安心して任せられる専門スキルと実績
【美術品輸送・保管】

専用トラックを独自開発【美術品専用トラック】

貴重な美術品が安心して滞在できるホテル
【美術品専用倉庫】

巡回展をワンストップでサポート
【国際輸送ネットワーク】

カトーレック株式会社

美術輸送東京支店
住所：東京都江東区枝川 2-8-7
TEL：03-5632-5555 FAX：03-5632-5540
email：i-art@katolec.com

美術輸送大阪支店
住所：大阪府摂津市東別府 1-5-34
TEL：06-6827-0757 FAX：06-6349-0130
email：i-art-osaka@katolec.com

美術品輸送の国際組織
ICEFATに加盟しています。

1977年に結成された、世界34ヵ国76社が
加盟する美術品輸送規格水準向上を目的と
した国際的な組織です。 #20200441900

全国美術館会議とカトーレックとの関わり (東日本大震災のレスキューについて)

森 誠 (もりまこと・カトーレック株式会社)

1. はじめに

1967年に設立された弊社は、加藤陸運株式会社として総合物流を開始し、1992年に社名をカトーレック株式会社と変更しました。美術事業は、1976年の四国民家博物館設立に始まり、その6年後に美術輸送東京支店を開設し、今日に至っています。国内拠点は、東京・中部(桑名倉庫)・大阪と3か所ですが、今後は拠点を東北・中国にも拡張する計画です。今回は、カトーレックと全国美術館会議との関わりを紹介いたします。

2. 全国美術館会議との関わり

毎年開催される全国美術館会議の総会には会員の皆様との情報交換が楽しみで顔を出しています。コロナ禍を受けて、業務では、顧客様への訪問や出張を控えていましたが、ようやくコロナ前のような東奔西走の日々が戻ってきました。全国美術館会議との一番の関わりは、2011年に発生した東日本大震災によるレスキュー活動にあります。事務局からの募集を受けまして、社内で慎重に検討し、参加することを決めさせていただきました。同年4月の石巻文化センター、7月の陸前高田市博物館に車両とスタッフを配置し作品の救出活動を行いました。当時、私は大阪営業所の責任者をしていましたので、現場には行かず、悶々としたものがありました。何かお手伝いができないかと思い、和歌山県立近代美術館の副館長の浜田氏に嘆願し、レスキュー現場とは雲泥の差ではありますが、盛岡の旧衛生研究所での燻

蒸棚作りに参加させていただきました。石巻、陸前高田においては、インフラは未復旧であること、さらに原発事故による放射線量にも注視しなければならず、また悪臭も重なる過酷な作業の中、集中力・体力を維持するには強靱な意思の強さが至要だったと聞いています。劣悪な環境の中、参加された皆様と一緒に被災作品の救出に奮闘したことで、社内にも美術館と関わる同志としての強固な結束が生まれたと思っています。

命あるものいつかは終焉を迎えます。しかし作品は世に残ります。救われた作品は、新しい息吹を吹き込まれ、これからの世代にも見ていただけるはずです。レスキュー活動の一端を担い、貴重な経験ができたことは、今後の業務活動においてもプラスであり、梱包技術や輸送の対応能力を深められたと感じます。

3. おわりに

今後も大惨事が起きないことを祈りつつ、万が一レスキュー募集があった場合、いつでも参加する態勢で臨んでいます。恐縮ながら、弊社の行動指針は次の5項目でございます。

- ①すぐやる ②現場に立て ③コストを意識
- ④柔らか発想を ⑤心をひとつに

これをモットーに社員一丸となって突き進んでいます。私も現場に出ることがありますが、一番大事なのは作品であると思います。作家様、所蔵者様の気持ちを思いながら今後も品質向上に努めて参りますので、何卒、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

株式会社集英社 [出版業]

- エア・ウォーター防災株式会社 [製造業] カトーレック株式会社 [一般貨物自動車運送業]
- 光明理化学工業株式会社 [製造業] 株式会社DNPアートコミュニケーションズ [サービス業]
- 株式会社伏見工芸 [展示装飾業] ヤマト運輸株式会社 [美術品輸送]

- 株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ [美術展企画等]
- 有限会社イー・エム・アイ・ネットワーク [展覧会企画制作]
- イセ文化財団 [芸術・文化振興]
- 株式会社NHKエデュケーション [映像を中心とするコンテンツ制作]
- 株式会社NHKプロモーション [展覧会等のイベントの企画・制作]
- 株式会社加島美術 [美術商]
- 協同組合美術商交友会 [美術業界団体]
- 株式会社グッドフェローズ [Web チケット販売、発券精算システム]
- 株式会社熊平製作所 [製造業 (収蔵庫設備・入退館ゲート)]
- 株式会社クレヴィス [展覧会企画・出版]
- 株式会社広済堂ネクスト [情報・印刷]
- 金剛株式会社 [製造業 (保管機器・銅製家具製造)]
- 進和テック株式会社 [ガス対策機器販売]
- 一般社団法人全国美術商連合会 [美術業界団体]
- 公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団 [製造業]
- 大日本印刷株式会社 [総合印刷]
- 株式会社東京美術倶楽部 [貸会議場]
- 凸版印刷株式会社 [製造業]
- 株式会社トップアート鎌倉 [額縁額装・画材]
- 株式会社パレット [文化財の保存修復用品 製造と販売]
- ピープルソフトウェア株式会社 [情報通信業]
- 株式会社美術出版社 [出版事業]
- 本州四国連絡高速道路株式会社 [運輸業]
- 有限会社丸栄堂 [美術商]
- 株式会社ユニークポジション [情報サービス業]
- 株式会社レンブラント [画商]
- 早稲田システム開発株式会社 [ミュージアム向け IT サービス提供]

- アート印刷株式会社 [デザイン・印刷・出版業]
- イカリ消毒株式会社 [サービス業]
- M&Iアート株式会社 [美術商]
- 株式会社ギャルリーためなか [画商]
- 日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社 [印刷業]
- 読売新聞東京本社 [新聞]
- ライトアンドリビト株式会社 [照明器具販売]
- 有限会社アート・フリース [グッズ制作・販売]
- 株式会社アートローグ [コンサルティング業]
- 影山 幸一 [アートプランナー]
- 株式会社学研プラス [出版]
- 株式会社求龍堂 [出版・デザイン業]
- 株式会社キュレイターズ [企画・デザイン・コンサルタント]
- 株式会社生活の友社「美術の窓」「アートコレクターズ」[出版社]
- 株式会社丹青研究所 [サービス業 (コンサルタント)]
- 株式会社TTトレーディング [HOGOS]
- トライベクトル株式会社 [翻訳サービス業]
- 株式会社美術年鑑社「新美術新聞」[出版業]

第3回定時社員総会等について

事務局次長 生島達久（おじまつひさ）

令和5（2023）年5月25日（木）、愛知県名古屋市において開催された第3回定時社員総会及び令和5年度第2回理事会についてご報告します。

社員総会に先立ち、同日の午前中、愛知芸術文化センター「アートスペースEF」において、令和5年度第2回理事会が開催され、博物館法の改正等を踏まえ、今後、会員（正会員、個人会員、賛助会員）入会のために想定される推薦基準及び第1回理事会開催（4月27日）後に入会申込のあった個人会員の入会並びに大災害時における連絡網組織の広域ブロック本部館・副本部館について審議が行われました。このうち、入会のための推薦基準については、事務局で文言の整理等を行い、改めて理事会に諮ることになり、個人会員の新入会、連絡網組織については、承認・決議されました。また報告事項として定款第42条第2項に基づく会長からの職務執行状況の報告があり、閉会しました。

その後、13時から愛知芸術文化センター「愛知県芸術劇場大ホール」において、愛知県美術館、名古屋市美術館、徳川美術館を担当館とし、愛知県美術館の拝戸雅彦館長の議長により、開催された総会では、愛知県の大村秀章知事から歓迎挨拶、文化庁の高井 絢博物館振興室長から祝辞の後、正会員140館の出席（議決権行使203個）により法人化後2回目となる対面

による社員総会が行われ、先ず令和4年度事業報告及び収支決算、令和5年度事業計画及び収支予算が決議され、越智裕二郎監事の逝去に伴う後任監事として田中 淳大川美術館長の選任、令和5年度の入会申込のあった正会員、女子美術大学美術館、慶応義塾大学アート・センター、半蔵門ミュージアム、国立工芸館、下瀬美術館の5館、個人会員14名の入会について承認されましたが、正会員1館、個人会員4名の退会があり、正会員が410館、個人会員47名となりました。

報告事項では、鳥企画委員長からの概要説明の後、各研究部会の幹事から活動報告と活動計画の発表、富田広報委員長から全国美術館会議ホームページと機関誌ZENBIについての報告、佐々木災害対策委員長及び貝塚災害対策副委員長からの活動報告をいただきました。

社員総会に続き同所において、特別行事としてフリーライターの大竹敏之氏による講演会（「名古屋めし」から「金シャチ」まで～アナタが知らない“シン名古屋”の世界）が行われ、名古屋に対しての新しい知識を得ることができました。

また、特別講演会後の情報交換会は、場所を名古屋クレストンホテルへ移し、名古屋という立地や新型コロナの第5類への移行により多くの方々の参加を得て開催できました。

総会2日目の5月26日は、総会開催の担当館をお願いしました愛知県美術館、名古屋市美

術館、徳川美術館の美術館視察が行われました。総会の準備と運営にご尽力をいただきました愛知県美術館、名古屋市美術館、徳川美術館の皆様改めて御礼申し上げます。

最後になりますが、第4回定時社員総会は、弘前れんが倉庫美術館を担当館とし、青森アートミュージアム5館連携協議会へ参加の他の4

館（青森公立大学 国際芸術センター青森、青森県立美術館、十和田市現代美術館、八戸市美術館）のご協力により、来年6月6日、7日に青森県弘前市で開催予定ですので、今年と同様に多くの会員館の皆様の参加により、年に一度の社員総会が有意義になるようよろしくお願いいたします。

専門委員会から

広報委員会から

広報委員会副委員長 尾崎信一郎（おさきしんいちろう・鳥取県立美術館整備局）

広報委員会は主としてホームページと機関誌『ZENBI』を通して、全国美術館会議の広報を担っている。災害対策委員会とは対照的に、平時にあって美術館をつなぐ役割を果たしてきた。ホームページと機関誌の定期的な更新と発行を中心として活動しているため、ここで特段新たに報告すべき事項はないが、この場を借りて、現在進行中の活動を報告し、あわせていくつかのお願いを記しておく。

会員を増やすために、全国美術館会議では個人会員と賛助会員の特典強化を進めている。機関誌『ZENBI』において全美フォーラムへの投稿資格を個人会員、賛助会員にも広げたことは前号でもお知らせし、本号においては個人会員2名、賛助会員1名からの投稿を掲載した。今後も積極的な投稿をお待ちしている。ホームページにおいても個人会員と賛助会員について閲覧制限を解除していく方向でシステムの改修にとりかかる予定である。また研究部会同様に専門委員会の活動についても報告を掲載したいと考えており、関連して災害対策委員会のメンバー

によって、災害対策委員会のサイト再構築の作業が進められている。

「全国的美術館リンク集」については各館で管理いただいているが、近年リニューアルを果たした館を中心にホームページのリンクが更新されず、切れている場合がある。どうか各館で確認いただき、最新情報をお知らせいただきたい。

ホームページも機関誌もそれぞれ担当が増えず、高齢化が進んでいる。引き続き一緒に仕事をしていただく方を募集し、活動の円滑化を図りたいと考えている。

ホームページも機関誌も必ずしも美術館関係者に周知されているとは言えない状況である。このため、新しい取り組みとして広報委員会でホームページと機関誌の広報チラシを製作し、総会の資料と一緒に配布した。今後は同じ内容を名簿等にも掲載し、より多くの関係者にホームページや機関誌にアクセスいただくように努力していきたいと考えている。引き続き皆様の御支援と御協力をお願い申し上げます。

連絡網体制とメーリングリスト始動

災害対策委員 副田一穂 (そえだ かずほ・愛知県美術館)

23号でお知らせしたとおり、昨年11月に「大災害時における連絡網」の新体制を発表し、メーリングリストも本格的に始動した。以後、このメーリングリストを介して災害対策委員と本部・副本部館との間で様々なやりとりがあるが、他の会員館には見えていない。今号では、この場をお借りして最近の活動をご紹介します。

2020年10月に国立文化財機構内に設置された文化財防災センター（「ぶんぼう」という愛称で呼んで欲しいとのことだ）は、現在「災害に対するミュージアム危機管理マニュアルの収集・分析事業」の予備調査を進めている。同センターからの依頼を受けて、2023年1月、災害対策委員会から本部・副本部館経由で当事業への協力館を募り、16館のご協力を得た。改めて協力館には心より感謝する。館の危機管理マニュアルには防災上秘匿しておきたい情報も多く、また言うまでもなく館ごとの立地や規模、運営体制等の諸条件に内容が大きく左右されるため、共有可能な部分は必ずしも多くはないかもしれないが、それでも国として取りまとめる意義は小さくないだろう。

新体制で迎えた3月11日（2012年12月の臨時理事会で「忘れてはならない日」と定められている）には、東京ブロック（首都圏

直下型大地震想定）、北信越ブロック（日本海北部震源地地震想定）、東海ブロック（地震想定）、九州ブロック（熊本地震想定）が連絡網訓練を実施した。また東北ブロックからは頻発する地震の被害把握を日頃から迅速に行っており、県単位のネットワークが有効に機能しているため連絡訓練は見送る旨、関東ブロックからは4月に訓練を実施する旨、お知らせいただいた。このように訓練の時期や方法はブロックごとの事情や状況に合わせていただいて、もちろん構わない。

新年度に入り、5月5日の石川県珠洲市を中心とする奥能登地震では、GW中にもかかわらず北信越ブロックが迅速に情報収集し、委員会にも即時情報共有いただいた。会員館に大きな被害がなかったことに安堵するとともに、連絡網を有効に活用いただいたことに感謝したい。同月11日の千葉県南部の地震では、震源地に最も近い会員館・千葉県立美術館の貝塚健氏（災害対策委員会）から被害なしとの報告を受けた。比較的軽微な地震で被害がまったく認められなかった場合でも、その情報を他ブロックに共有するよう習慣付けておけば、大災害時にも活かされるだろう。

さて、連絡網体制の年度ごとの入れ替わりについては、実質的に各ブロックの自主的な

運営にお任せしているところだが、形式的には「大災害時における連絡網実施要領」の「広域ブロック本部館は、理事会で協議して選定

し、2年ごとに選定する」というルールに基づき、5月25日の理事会に諮り、下記のように決定した（◎は前年度から変更のあったブロック）。

北海道ブロック	本部館： 副本部館：	北海道立近代美術館 札幌芸術の森美術館
東北ブロック	本部館： 副本部館：	福島県立美術館 岩手県立美術館
◎関東ブロック	本部館： 副本部館：	栃木県立美術館 千葉県立美術館
東京ブロック	本部館： 副本部館：	東京都美術館 東京国立近代美術館
◎北信越ブロック	本部館： 副本部館：	富山県美術館 石川県立美術館
◎東海ブロック	本部館： 副本部館：	静岡県立美術館 三重県立美術館
◎近畿ブロック	本部館： 副本部館：	国立国際美術館 和歌山県立近代美術館
中国ブロック	本部館： 副本部館：	島根県立美術館 岡山県立美術館
四国ブロック	本部館： 副本部館：	徳島県立近代美術館 愛媛県美術館
九州ブロック	本部館： 副本部館：	福岡市美術館 宮崎県立美術館

本部・副本部をお引き受けいただいた館には心より感謝する。些細なことでも構わないので、メーリングリストを日常的に活用いた

だき、積極的なコミュニケーションをお願いしたい。

『ZENBI』では、次の要領で広く
皆さんからの原稿をお待ちしています。

[原稿の内容]

- ・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
- ・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
- ・原稿には表題を付してください。

[投稿の資格]

- ・全国美術館会議正会員の職員、個人会員、賛助会員の職員であればどなたでも投稿できます。
- ・匿名の投稿は受けつけません。

[投稿に係る詳細]

- ・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

[締切]

- ・第 25 号 (2024 年 2 月発行予定) については 10 月 31 日、
第 26 号 (2024 年 8 月発行予定) に関しては 4 月 30 日を締切とします。(当日必着)

[提出先]

s-osaki@pref.tottori.lg.jp (尾崎)
iked@kanazawa21.jp (池田)
aoyama_k@nmao.go.jp (青山)

[問い合わせ先]

内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。
〒 682-0816 鳥取県倉吉市駄経寺町 212-5
倉吉未来中心 2 階 鳥取県立美術館 (美術館整備局)
(一社) 全国美術館会議広報委員 尾崎信一郎
s-osaki@pref.tottori.lg.jp TEL 0858-47-3011

1. 全般事項

- (1) 本誌への投稿者は原則として下記に限る。
 - ア 全国美術館会議正会員が所属する館の職員
 - イ 全国美術館会議個人会員
 - ウ 全国美術館会議賛助会員の職員
- (2) 投稿原稿は他誌 (電子媒体を含む) に発表されていないものに限る。
- (3) 原稿 (写真を含む) は原則として電子メールで提出すること。
- (4) 原稿は原則として 2,000 字程度とする。

2. 投稿文の採否

- (1) 投稿文の採否、掲載順などは (一社) 全国美術館会議広報委員会 (以下「広報委員会」という。) に一任とする。
- (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について

- (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
- (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
- (3) 個人を同定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
- (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について

校正については、初校をもって著者校正とする。その後は広報委員会の責任とする。

5. 著作権について

- (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は (一社) 全国美術館会議に帰属するものとする。
- (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典 (掲載誌名、巻号ページ、出版年) を記載するのが望ましい。

6. その他

- (1) 原稿料は支払わない。
- (2) 掲載投稿一編につき、本誌 5 部を進呈する。

制定：平成 23 年 7 月 24 日
改正：令和 4 年 1 月 31 日
全国美術館会議広報委員会

賛助会員、 個人会員の皆さまへ

「全美フォーラム」について、正会員の職員以外にも個人会員、賛助会員からの投稿を広く募っています。多くの立場からの活発な投稿をお待ちしております。

同様に個人会員、賛助会員の皆さまへの特典強化の一環として、機関誌や全国美術館会議ホームページでの賛助会員のご紹介を充実させていく予定です。

また、ホームページは現在正会員以外には閲覧制限がなされていますが、個人会員、賛助会員の方に対しては制限を緩和すべく、当委員会で準備を進めているところです。

今後も一層のご支援、ご協力をお願いいたします。

広報委員会

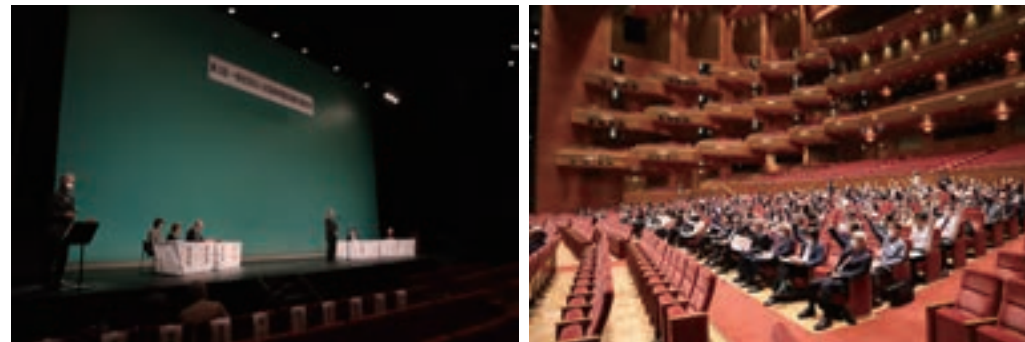
編集後記

『ZENBI』の24号をお届けする。新型コロナ感染症をめぐる混乱も落ち着きを見せ、美術館にも少しずつ日常が回帰しつつある。今さらながら疫病の流行が歴史をそれ以前とそれ以後に分かつ一つの事件であったことを感じる。美術館にとって大変な苦境であったことに間違いはないが、そこから得た教訓も多かったのではなかろうか。

「広報委員会から」にも記したが、前号より個人会員、賛助会員にも投稿の門戸を広げ、今号には早速2名の個人会員、1名の賛助会員より原稿をいただいた。美術館の現場から離れても、あるいは賛助会員という立場からもそれぞれに美術館や展覧会に対して発言したい思いをお持ちの方は多いと思う。今後も活発な投稿を期待している。

梅雨末期ということであろう、この後記を書いている窓の外は土砂降り、当地にも朝から大雨警報が発出されている。ゲリラ豪雨という言葉もはや日常的に使われるようになった。前々号と前号に災害対策委員会からの報告を掲載したが、今後も事務局や広報委員会同様、災害対策委員会にもコラムの一つをお願いし、防災に関する話題を毎号掲載していただくことにした。美術館とは災害と戦う砦であることをあらためて実感する。日常より常に災害に備える意識を忘れないようにしたい。

(〇)



第3回 一般社団法人全国美術館会議社員総会（愛知芸術文化センター）の様子

全国美術館会議ホームページでは、
美術館運営に有益な情報が掲載されています。
ぜひご利用ください。



全国美術館会議
ホームページ



トップページ